

実践報告

遠隔授業充実への取り組み
—共通教育科目「文学と言語」の実践を例に—

岩根 浩

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(令和3年1月12日受理)

Efforts to Enhance Distance Education
—Through the Practice of Common Education Subjects “Literature and Language”—

Hiroshi IWANE

(Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted January 12, 2021)

Key words : Distance Education 遠隔授業
Active Learning 主体的・対話的で深い学び
Evaluation of Instructional Effectiveness 授業評価

1. はじめに

コロナ禍という未曾有の危機で始まった令和2年度は、授業の在り方を転換させる年となった。これまで普通に行われてきた「対面授業」から「遠隔授業」への転換である。

これまで対面授業や遠隔授業についてほとんど認識のなかった私にとって、実に不安な門出であった。4月10日、神埼キャンパスでの「授業方法説明会」を聞き、「これだけは」という方法を教わる。同15日、人生初めての遠隔授業「文学と言語」が始まった。同16日、学部FD研修会。メールによる簡便な遠隔授業の例が示される。すぐに取り入れて実践できるものもあったが、私には簡便ではなかった。機器の操作をどのようにするのか、全学生への連絡や資料の配付をもれなく行うためにはどうしたらいいのか、学生が意欲をもって授業に臨むためにはどういう手立てをとればいいのか、学生に力の付く授業が果たしてできるものであろうか、などといった不安な思いが頭から離れなかった。それから半年、遠隔授業の充実を求めて取り組んできた。多くの課題が出てきた一方で、成果も得ることができた。

本稿では、全学科共通科目「文学と言語」における実践を振り返りながら、遠隔授業の在り方や、学生個々に対する学習の保障等について報告するものである。成果よりも、自身の試行錯誤、悪戦苦闘の実状の紹介になることを何とぞお許しいただくとともに、皆様の率直な批正をお願いしたい。

2. 授業のねらい・到達目標・授業計画

本授業は、令和2年度前期（1年次）、看護学科を除く6学科110名を対象に実施したものである。

1 授業のねらい

本授業のねらいを次のように設定した。「日本語の特性や、言葉の意味と語感との関係などについて認識を深めるとともに、代表的な児童文学作品や古典などを取り上げ、言葉の意味の分析、文学作品の鑑賞や作者像の理解を通して、文学作品に内包されている教育的価値（自然観・社会観・豊かな心情・ものの見方や考え方・感性など）を理解する」。重点は、文学作品を読む中で言葉にこだわり、表現の効果について考えるとともに、作者像を理解することであると考えた。つまり、「作品論」と「作者論」

の両面から文学作品に内包される教育的価値を理解することである。

2 授業の到達目標

- (1)日本語の特性、言葉の意味と語感との関係について、具体例を基に説明することができる。
- (2)詩・短歌・俳句・物語などの文学作品に接し、その特徴や価値に気付くとともに、文学作品を読む面白さを理解し味わうことができる。
- (3)我が国の代表的な児童文学作品を読み、作品の主題を考えるとともに、作者の生き方・考え方に対して興味をもつことができるようになる。
- (4)伝承されてきた昔話や古典には独特な表現やリズムがあり、その中に込められた人々の思いや願いがあることに気付くとともに、代表的な作品を暗唱することができる。
- (5)言葉のもつ重要性を認識し、自らの言語生活をより充実させていこうとする意欲をもつことができる。

3 授業計画

遠隔授業の決定を待って授業計画を修正した。

（下線は、特に「主体的・対話的で深い学び」を意識した学習内容を示す。詳細は後述）

表1 授業「文学と言語」計画表

回	学習内容
1	オリエンテーション（授業の見通し、学生の実態把握）
2	<u>前回の振り返り（文学を読むことの意義）、言葉の意味と語感</u>
3	「金子みすゞ」の世界① （金子みすゞの年譜、みすゞの生き方・考え方）
4	「金子みすゞ」の世界② （金子みすゞの詩及びみすゞに関する評論を読む）
5	「金子みすゞ」の世界③ （金子みすゞに関する逸話の紹介、各自で①～③のまとめ）
6	「金子みすゞ」の世界④（①～③のまとめを使って交流）
7	『スイミー（日本語訳）』を読む①
8	『スイミー（英語訳）』を読む②
9	「宮沢賢治」の世界（賢治の年譜、賢治の生き方・考え方）
10	『やまなし』を読む （作品の分析、「宮沢賢治」の世界について）
11	「新美南吉」の世界（新美南吉の年譜・生涯）
12	『ごんぎつね』を読む
13	『大造じいさんとガン』を読む、椋鳩十の生涯 各自で第13回のまとめ
14	「椋鳩十」の世界（第13回のまとめを使って交流）
15	<u>学習のまとめ</u> （言語文化を学ぶ意味、言葉を豊かにする、レポート作成）

3. 授業の展開に当たって

前章【表1】の中で、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現に向けた授業改善を推進すべく、学習内容を設定した。

設定に当たっては、岩根（2017）が示す「『主体的・対話的で深い学び』のある授業が備えるべき視点や条件」を踏まえている。¹⁾

- ①学習の目的や必要性の意識化
- ②価値ある学習課題の設定
- ③学習の見通しと振り返りの明確な位置付け
- ④自分の学びや変容の自覚と、それに関する説明や評価
- ⑤互いの知見や考えを広げ、深め、高める価値ある言語活動の位置付け
- ⑥言葉の意味や働き、言葉で思考する方法や喜びを実感し、自分の思いや考えを深めること

4. 授業の実際（1）

4～5月に「学修ポートフォリオ」を中心とした授業、6～7月に「Zoom」を利用した授業に取り組んだ。

以下、授業の特徴が分かる実践（第1回～第6回、第13回～第15回）を中心に、「授業のめあて」「学生に課した課題」「使用した教材」「学生の反応」「教師の指導助言」などの観点から授業の実際を紹介し考察を加えていく。

【第1回】では、「文学を読むことの意義について、自分の考えを明らかにする」というめあての下、次の詩を読み、想像したことをまとめる授業を行った。

たばこ屋さんの角を曲がると 沈丁花の花の香りがします。その花の香りをたよりに来てください。すぐに分かります。

隣の町に引っ越していった あの子の誕生日の招待状に そう書いてあった。²⁾（実際は縦書き）

この課題に対して、ある学生はこう書いている。

私が想像したのは、田舎の風景です。登場人物の二人は幼馴染み。女の子が急に引っ越してしま

い、今二人は久々の再会を果たそうとしている。女の子が引っ越した隣の町は、とてもどかな田舎で、周りは田んぼが多く、ピンクや白の花々がきれいに咲いている。手紙を受け取った男の子は、手紙を読んで微笑んでおり、その日の天気は男の子の心を表すかのように、快晴です。

次に、「文学を読むとはどのようなことか」「何のために文学を読むのか」についてまとめた。

この課題に対して、先の学生は、こう記している。

文学を読むとは、その文学に書いてある文字から時代背景や感情などを読み取るということだと思います。嬉しいや悲しいなど、はっきりと言葉に表してあるものを読み取るのではなく、その時の情景や表現から登場人物の心情を読み取り、より深く文学を読み味わうことが大切だと思います。また、文学には難しい言葉や表現などが多く使われています。そうした言葉や表現を学ぶためにも文学を読むのだと思います。

筆者は、この二つの課題に目を通して、以下のようなコメントを「学修ポートフォリオ」に記した。

場面の設定（田舎の風景）、あの子と私（幼馴染み）、二人の心情描写（微笑み、天気）と、文学の構成要素がきちんと入っており、確かで豊かな解釈ができていることに感心しました。特に、微笑みながら手紙に目を通して男の子の表情と、晴れやかな空とを重ねているところが巧みだなあと感じました。

これらを裏付けている理論を分かりやすく整理できています。文学の本質をよく理解しています。時間に限りはありますが、文学と言葉との関係性を一緒に追究していきましょう。

こうして、【第1回】の課題に対する学生個々の回答状況をつぶさに見ることで、文学に対する興味・関心の度合い、今後の学習を進めていく上での様々な課題（学力や知識・技能の獲得状況等）を把握することができ、授業の構成や指導方法の工夫等が明らかになってきた。

また、「学修ポートフォリオ」の提出（提出期限は一週間から十日以内に設定。課題の提出をもって出席と判断する。）後、必ず、「一人一人の学習状況

に応じたコメント」の記入に努めた。

しかし、他の授業との兼ね合いから、週当たり300通ものコメントを返さねばならず、膨大な時間を要したが、学生全員にもれなく送付することができた。

【第2回】では、ワークシートを使い、「文学を読むことの意義」について整理した。その後、課題「言葉の意味と語感」について、「学修ポートフォリオ」にて提出させた。

授業で使用したワークシート（一部）を次に示す。

『文学と言語』（第2回） 令和2年4月22日（水）

- 1 本時の概要く略>
- 2 文学とはく略>
- 3 **文学を読むとはどのような行為か**
作者の体験を言語化した作品を読み取り、**作者の体験世界をイメージ化する。**

4 「語感」とは何か。その定義を明らかにしつつ、例を挙げて説明しなさい。
この後に続けて、200～300字程度でまとめてください。

<学生の解答の例>

語感とは、言葉から受ける感覚的な印象、また、そうした言葉の印象を感じ、識別する能力のことをいいます。例えば、「かちかち・かちかち」という言葉には固いという印象を持ち、「ハラハラ・ドキドキ」という言葉には、緊張しているという印象を持ちます。また、日本語には、同じような意味なのに印象が微妙に異なる言葉が多くあります。例えば、上の「かちかち・かちかち」では、「かちかち」のほうがより固いという印象を持ちます。このように、言葉の音から感じるイメージのことを語感といいます。

終わりに、【第1回】と【第2回】の授業のまとめとして、「学修ポートフォリオ」で次のようなコメントを記した。教師の指導性を発揮する場面である。

前回の授業をまとめた資料を基に「文学を読むとは何か」を整理する。第一は「今まで自分の中で言葉にならなかった体験の意味を再確認したり新たな創造を行ったりすること」であり、第二は「作者の体験に寄り添って読んだり、自分の体験を基にして読んだりすること」である。

読みを行う際には、一つの表現を巡って豊かな解釈をし合う。その一方で、自分の思いに固執した解釈をすることがある。前者を「開かれた読み」、後者を「閉じられた読み」と呼ぶ。国語科で培う想像力は「叙述に即した確かな理解」の上にか

成立しない。そうでなければ、独りよがりの読みに陥ってしまうことになる。

私たちは将来、社会人として、子どもに関わる者として、真正の国語力をもった理解者、表現者でありたい。「根拠・主張・理由づけ」という論の進め方を大事にしたい。「私は、〇〇と思う。その根拠は、…だから、…と書いてあるから」という思考の基本型を大事にしていきたい。

授業の成否は、学習者に「どこで教え、どこで考えさせるか」という教師のタクトが鍵となる。今後も、徹底して指導すべき点と能動的な学習の場を明確にしたメリハリのある授業を展開していきたい。

【第3回】から4回、『金子みすゞの世界』と題して授業を実施した。特に、学生の意欲を大事にするため、(1)導入の工夫、(2)資料の工夫・選択、(3)指導方法の工夫に力を入れた。

(1) 導入の工夫

ほとんどの学生が小学校の国語の時間、金子みすゞの詩『わたしと小鳥とすずと』を読んだことがあると答えている。しかし、金子みすゞはいつ頃活躍した人なのか、どんな考え方を生きてきた作家なのか、どんな詩を書いているのか。正確に理解している学生は少ない。

そこで授業では、「作者論」から学ぶというスタンスに立ち、金子みすゞの生涯をたどっていくことから始めていくようにした。

その際、作者と自分の考えを照らし合わせたり、今般の社会状況や問題などから自分の生き方を見つめ直したりすることなどを大事にしつつ、文学や言語に触れていく楽しさや面白さを感じ取ってくれるような授業を行うべく、「導入の工夫」に心がけた。

以下に掲げたのは、【第3回】から【第5回】の導入時における「教師の語り」である。

【第3回】

皆さんは、金子みすゞという詩人を知っていますか。小学校の国語で『わたしと小鳥とすずと』という詩を読んだ人もいることと思います。

今日から三回、金子みすゞについて学習していきます。第一回目は、金子みすゞの生涯をたどっていきます。そして、金子みすゞ研究の第一人者である矢崎節夫先生（金子みすゞ記念館長）の解説・エッセイに目を通しながら、「金子みすゞの

世界」へ案内していきます。

【第4回】

前回は、金子みすゞの生涯や生き方・考え方などを概観するとともに、小学校で学習する詩の中から一つを取り上げて読んでもらいました。

金子みすゞの詩は、現代から見れば、随分古いと感じられますが、なぜか私たちの心を強く打ち続ける作品ばかりです。

現況のコロナ禍、混沌とした時代を生きている私たちにとって、金子みすゞの存在は実に大きなものであると言えるでしょう。

今回の資料として、金子みすゞの詩7編と、野呂昶（のろさかん）氏の『金子みすゞ私感—現代人の精神の清水』と題するエッセイを添付しました。

【第5回】

「故（ふる）きを温（たず）ねて（温（あたた）めて）、新しきを知る」という「論語」の言葉を皆さんは知っていることと思います。「温故知新」ですね。『広辞苑』は「昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること」と書いています。

緊急事態宣言が解除され、徐々に社会が動き始めています。「金子みすゞの世界」が今後の社会の在り方を考える一つの指針を与えてくれるであろうと考えています。

ところで、私が大学院生の頃、当時の学長が「温故創新」という話をされたことを思い起こしました。「新しきを知る」から「新しきを創る」です。新しい物事に適応するためには、昔のことをよく調べる。すると、知識や方法が得られる。そして、それを活用して新しいものを創り上げる。こんなお話でした。

さて、「金子みすゞの世界」を考える授業も最終回を迎えました。遠隔授業ゆえ、皆さんに私の思いを十分伝えることができなかつたことと思います。しかし、一人一人のレポートを読みながら、各自、金子みすゞという作家の生き方・考え方を知り、金子みすゞが詩で書きたかったことを自分と重ねて想像したり追求したりしていくような、文学の楽しさ、面白さを味わってくれていることを実感しました。

今日は、金子みすゞの愛娘（上村ふさえさん）についての資料を準備しました。三回の授業を振り返り、400字程度でまとめてください。題名や

内容は自由です。資料は下のURLからダウンロードしてください。6月4日（木）までに「学習ポートフォリオ」で提出してください。

(2) 資料の工夫・選択

価値のある資料をどのように提示するかということが、授業自体の質を高めることにつながる。本実践では毎回、学生が知りたい、読んでみたい、考えてみたいと思えるような資料の提示に努めた。

【第3回】の冒頭では、『金子みすゞの110年』³⁾と題した資料から、以下の文章（原本は縦書き、下線は引用者）を提示し、学習の見通しをもたせた。

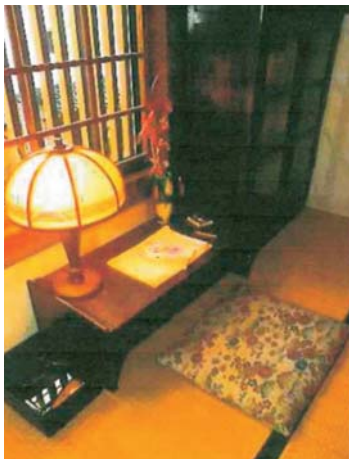
金子みすゞの110年のなかで、みすゞが現実を生きたのは、初めのたった27年足らずの歳月でした。その短い生涯に、みすゞは、なにを見、なにを聞き、なにを感じ、なにを考え、なにを思ったのでしょうか。

明治36（1903）年に生まれ、昭和5（1930）年に亡くなった、金子みすゞの人生の真ん中に、15年の大正時代がすっぽりと重なっています。人間にとって大切ななにかを感じさせてくれる大正時代の一瞬のきらめき、そして、みすゞの魂をゆさぶった童謡という当時まったく新しい表現。

みすゞの残した数々の作品は、いま、私たちの心に響き、ますます輝きをましているように見えます。その秘密はどこにあったのでしょうか。時代のなか、環境のなかで、みすゞが出会ったものを探りながら、その生涯を見ていきましょう。

さらに、平成29年3月8日から9日、金子みすゞの足跡を辿って下関から仙崎を旅した際に、感じたり考えたりしたことを学生に語った。金子みすゞの写真、生家（現在は金子みすゞ記念館）の様子、ふるさと仙崎（今の長門市仙崎）への案内地図と周りの風景写真などを使って紹介した。

この時「ここにみすゞが座って本を読んだり詩を書いたりしていたのかと思うと、胸が熱くなってきました」と語った。顔は見えないが、私の話を聞き自分に引き寄せて考える学生の姿を、「学修ポートフォリオ」で想像することができた。（104頁参照）



(3) 指導方法の工夫

「学修ポートフォリオ」に目を通していく中で、どの学生も金子みすゞという作家の生き方や考え方を理解し、みすゞと自分を重ねながら、文学を読む楽しさや面白さを味わっているという手応えをつかんだ。授業を通じて、個々の学生の学びが次第に高まっているのを実感することができた(104頁参照)。

そこでさらに、「学びの意識化(教師側から言えば、授業の質を高める指導方法の工夫)」に取り組んだ。それは、100名を超える学生一人一人の学びを互いが共有し合い、互いの考えやよさを認め合いながら、自分の考えをよりよいものに高めていく「対話的な学び」を遠隔授業においていかに実現していくかという課題である。

次に、本課題を解決すべく実施した授業の概要を紹介する。因みに、【第5回】からZoom利用の授業が始まった。

【第5回】の概要は、次のとおりである。

- 1) 前時の学習を振り返るとともに、金子みすゞに関する逸話を取り上げて講義した。

- 2) 課題に取り組むに当たって、以下のことについて話題にし、学習の動機づけを行った。①「温故知新」から「温故創新」へ②金子みすゞが時代を超えて私たちに語りかけているものとは何か③作家の生き方・考え方を知るといこと④文学を読むということ⑤これまで三回の授業の振り返り。以上の5点である。

- 3) 学生は、前述の5点を踏まえて、配付資料(Googleドライブに貼付)を読んで自分の思いや考えを自由にまとめ、「学修ポートフォリオ」にて提出した。

【第6回】の授業の特徴及び、授業を構成する上での考え方は、次のとおりである。

- 1) 「『金子みすゞの世界』のまとめであり、自分の読みや学びを他者と比べ合うことで、自分の読みや学びを価値付けようとした。
- 2) 【第5回】の「学修ポートフォリオ」の中から全体に紹介したいレポートを教師が選び、それをWordに貼り付けて作成した資料(テキスト)を使った。次に掲載する「学習者の反応をテキスト」にしたのである。
- 3) 学習とは、個の確立であり、個に始まって個に終わる。人は、他者からの学びを自分の中に取り入れて成長していく。メタ的思考のできる学び手になること、なろうとすること、なり続けようとする事であるとする。

【第6回】では、こうした関心・意欲・態度の醸成に重点を置いた授業を行った。

- 4) ここでの評価は、数的に行うというよりも、学生一人一人の思いや考えを丁寧にとどったり、変容を見取ったりしながら行うことに重きを置いた。授業で使ったテキスト(学習者の声、反応を拾った)

・金子みすゞの詩がさらに美しくみずみずしいものに思えてきました。普段、深くまで知ろうとしていなかった自分を振り返った時、こんなに感じ方が変わるのかと改めて知ることができました。

・自分は福祉を学んでいる身であることもあり、金子みすゞの生涯を見てきて、どうしたら幸せな人生を歩めたのか、などと考えてしまいます。ここまで現代にも影響を与える作品を生み出した優しい方が、幸福であったと言ひ難い人生を送ったことが非常に悲しいです。現代社会では、だいたい女性も生きやすい環境になったとはいえ、やはり女性であることによる障壁もまだあると思います。その障壁を取り除き、性別に関係なく平等に世の中を歩むことのできる環境になれたらいいなあと思いました。

・第一回では金子みすゞの生涯についての資料を読み、作品から溢れる優しさ、娘を守るために自ら命を絶った母親としての強い愛を感じることができました。教科書で学んだことがある作家の生涯について学ぶのは初めてだったので、すごく楽しい学習となりました。第二回では多くの詩に触れることができ、自分の知らない作品に出会う楽し

さ・面白さを感じることができました。悲しみ・寂しさ・希望・戸惑い・不安を感じることができました。第三回ではみすゞの娘に関する資料を読み、お母さんの記憶がないことを少し寂しく思いました。遺書を読んだことにより母の愛を感じることができたという部分では安心した半面、心が痛みました。「母が私を道づれにしなかったおかげで命がつながっているんだな」という部分からは、家族の強い絆を感じることができました。

・私は小学校の時から金子みすゞの詩に出会い、いつ読んでも自分の心が穏やかになり、なぜこのような優しい詩を書けるのだろうと思っていました。三回の授業で一番感じたことは、みすゞはとても辛い人生を送っていたことです。父はおらず母・兄弟とも別れて暮らし、そんな中自分と向き合うことのできる詩と出会いましたが、結婚相手を決められ、夫から詩を書くことを禁じられます。娘のおかげで彼女は自信を取り戻しましたが、夫と上手くいかず離婚し、26歳という若さで亡くなりました。このことを知ったときはとても胸が痛かったのですが、辛い人生を数々乗り越えてきたからこそたくさん良い詩を書き、普遍的な美に届いていること、作品を包むヒューマンな姿勢（優しさ、温かさ）、繊細で透明な感性、人生への哀感、宗教的求道精神など、彼女の詩には魅力があり、誰からでも認められるのだと感じました。また、娘である上村ふさえさんは、家が破産したり両親がいなかったりと母と同じように大変だったと思います。遺書を読んだ時の複雑さは彼女以外誰も理解できないかと思うと、辛くなりました。授業を受けてみすゞの生き方、詩の魅力や娘さんの話など様々なことを学べてよかったです。将来、児童にみすゞの詩を教える時がきつと来ると思うので、学んだことをしっかり覚えておきたいと思っています。

5. 授業の実際（2）

使用した教材は、小学校の共通教材とも言える、椋鳩十の『大造じいさんとガン』である。ここでは、「椋鳩十の世界」と題した学習を【第13回】と【第14回】に組んだ。

ここでは、紙幅の関係上、粗筋を紹介する。

ある年、大造じいさんが狩り場にしている沼地にガンの群れがやってきました。ガンの群れは、左右の翼にいか所ずつ真っ白な交じり毛のある「残雪（ざんせつ）」と呼ばれる一羽のガンに率いられています。大造じいさんは、残雪が来るようになってから、一羽もガンを手に入れることができなくなっていました。

大造じいさんは、今年こそはと考え、わなをしかけました。翌日、一羽のガンを生け捕りにすることができましたが、その翌日以降は、一羽も捕まえることができませんでした。こうして、大造じいさんと残雪の戦いが始まります。

翌年、大造じいさんは、タニシをばらまいて待ち伏せをしますが、知恵のある残雪に気付かれて、狩りは失敗しました。

そのまた翌年、大造じいさんは、ガンが一番最初に飛び立ったもののあとについて行くということを知っていたので、前に捕まえたガンをおとりにして、ガンをおびき寄せようとした。しかし、大造じいさんの不意を突き、残雪に導かれたガンの群れが一斉に飛び立ちました。不思議に思った大造じいさんが見ると、白い雲の辺りから、ハヤブサが急降下して来ました。危険を察知した残雪が、群れを逃がすために飛び立ったのです。しかし、大造じいさんに餌付けされていたガンは、野性の感が鈍っていたので、一羽だけ飛び遅れました。ハヤブサは大造じいさんのガンに容赦なく攻撃を仕掛けます。その時、残雪が舞い戻ってきました。大造じいさんは、残雪を仕留めるためにいったんは銃を構えますが、撃ちませんでした。残雪とハヤブサはもつれ合って、沼地に落ちます。二羽はおお激しく戦っていました。大造じいさんが近づくと、大造じいさんの姿を見かけたハヤブ

サは、飛び去っていきました。残雪は、残りの力を振り絞って、頭領としての威厳を保っています。大造じいさんは、残雪を助け、春になったら、残雪を逃がしました。大造じいさんは、「ガンの英雄」を「ひきょうなやり方」ではなく、「堂々と戦って」捕まえたかったのです。

【第13回】では、以下に掲げたねらいをもって授業を行った。併せて、授業の概要も示す。

- 1) 授業では、金子みすゞを取り扱った場合と異なるスタンス、つまり、「作品論」の立場をとり、『大造じいさんとガン』を熟読させることから始めた。
- 2) 本教材は、学生にとって馴染みがある（小学5年教材）ものゆえ、文学が苦手な学生でも楽しめるのではないかと考えた。
- 3) 小学校で取り扱う教材を大人が読むことによって、一歩進んだより深い解釈ができ、一見易しいと思われる作品の中にこそ、深い主題性が隠されていることや、文学の豊かさ、奥深さに気付かせたいというねらいがあった。
- 3) これまでと同様に、教材を Google ドライブに貼付し、読後の感想を自由にまとめ、「学修ポートフォリオ」にて提出させた。



【椋鳩十文学記念館：鹿児島県始良市加治木町】

- 4) 授業の実践に当たって、平成31年2月19日、「椋鳩十文学記念館」を訪れた。その際に得られた資料を活用して講義をした。「百聞は一見にしかず」のごとく、現地に足を運ぶことによって見えてくるものがあると、改めて実感することができた。

【第14回】では、【第13回】のまとめ（学生が「学修ポートフォリオ」で提出）を Word に変換し、104頁で述べたような「テキスト」を作成した。そして、これを使って遠隔での交流を行った。「テキスト」には、学習者個々の学びの足跡が詳細に描かれており、遠隔であっても、否、遠隔だからこそ得られる授業効果、学びの深まりを感じることができた。

また、小学校の教材を大学生になって読むことで、子どもの頃には分からなかったけれども、時間が経って理解できるようになったことの喜び。文学を読むことの楽しさや面白さに気付かされたこと。その他、学生は様々な思いを述べている。

以下、幾つか紹介したい。（下線は引用者）

・ 椋鳩十の動物文学は、動物と人間との共存・共生の大切さを訴えている。椋鳩十の文学記念館ではここでしか味わえない魅力が詰まっていると思う。ぜひ行ってみたい。

・ 美しい自然の中の営みに真剣に生きているガン。残雪と大造じいさんとの真剣に生きる姿に感動しました。私の父も祖父も社会の中で真剣に生きてきたのだらうと思いました。この作品にも女性の姿がありません。それでも内助の功を忘れては世の中が成立しないことは言うまでもありません。次に、時代背景や作者を理解して作品を読んでみると冒頭の疑問（「わたしたちは自分の力で生きている。しかし、生かされているのかもしれない。何かの目的のために。そう疑問に思ったことはないだろうか。」）が頭をよぎりました。

・ 私も椋鳩十さんのように一心にこれをやりたいと言えるようになりたいと思いました。そのためには今のようなことできつと思わないように勉強や実習を頑張りたいです。また、椋鳩十さんは読書が好きで詩人になりました。私は料理が好きで管理栄養士になりたいと思っているので、好きなことをもっともっと好きになれる自分でいたいと、椋鳩十さんの生い立ちを読んで学ぶことができました。

・ たかしよいち氏が「大造じいさんとガンには母親の愛の崇高さも込められている」と書いていました。このことは小学生のころには全く気が付かなかったのですが、今回の講義で知り意識して読んでみると、仲間を守るところであったり、傷が癒えるまで看病したりという箇所を見つけました。新しい視点を発見することができてよかったです。

・ 今回の授業では、過去の記憶を取り戻しつつ、新たな気づきが多い授業だった。「大造じいさんとガン」という話を聞き、小学生の頃をよく思い出すことができました。当時の課題でこの「大造じいさんとガン」の文を全部写すという課題が出た。当時の自分はそれが嫌で仕方なく、提出期間ギリギリまで頑張って写していたのを思い出した。その課題のおかげもあってか分からないが、今回の話はよく理解できたと思う。当時は課題のことだけを考えた話を読んでいたもので、成長した今ももっと話を理解しながら読み進めていきたいと思った。今までの授業を全て振り返って見ると、本当にたくさんさんの作品に触れ合い様々な感情や気持ちが出てきた。懐かしい気持ちや、今だから分かるという共感。この気持ちを大切に、これからもたくさんさんの作品に触れ合っていきたい。

・ 私がこれまで名前すら知らなかった椋鳩十は、児童文学においては宮沢賢治、新美南吉、椋鳩十と、現代に最近まで活躍されていた方の中で3本の指に入るほどの大変な業績を残された方だということを知った。また、「母と子の20分読書」などを呼びかけた人物だということを知り、椋鳩十が世の中に与えた影響の大きさを感じた。さらに、戦争があり、お国のために命を捧げる事が素晴らしいとされていた時代の中で、動物の生き抜く姿を通して人間の愛や命の尊さを書いた児童文学者であったということを知り、なぜ椋鳩十と、椋鳩十の作品が愛され、評価され続けているのかが分かった。(中略)「大造じいさんとガン」からは、息の詰まるような時代の中で椋鳩十が貫いた「命の尊さ」「生きること」への想いを感じた。そして、「なぜ大造じいさんは残雪を打とうと意気込んでいたのに打たなかったのだらう」「なぜ最後に逃がしたのだらう」などと自分の中で疑問を持ち、大造じいさんの目線に立って考えながら物語を読み進めることができた。とても意味のある時間になった。

・ 文学についての知識をある程度身に付けてから読むと、内容や作品の中の登場人物の感情の捉え方が全然違うことが分かった。文学はとても面白くて、奥が深いものだなあと改めて思った。

【第15回】でも、【第14回】と同様な手法を駆使して授業を行ったが、授業「文学と言語」の最終回でもあることから、【第1回】と【第2回】で扱った「文学を読むことの意義」に立ち返り、まとめを行った。

学生は、15回の授業を通して、作家の生き方や考

え方、ものの見方などを自分に引き寄せて考えたり、今後の自分の学びの在り方や抱負などを、根拠・理由・事例を交えたりしながら具体的に述べることができた。その証左は、以下に掲げる振り返りから確かめることができる。全員の声は拾えないが、次に掲げたい。(下線は引用者)

・ 最初「文学と言語」という言葉を聞いただけではどんなことをしていき何を学んでいくのか、全く想像が付きませんでした。しかし、金子みすゞさんから始まった、この「文学と言語」は、学んでいくたびに一つ一つの作品に魅了されていきました。特に金子さんの生涯を振り返ったときの授業の内容は、波乱なことばかりで学ぶことが多くとても印象に残っています。私にとって、一番初めに勉強するのが金子みすゞさんの生涯や生き方についてという内容で本当によかったと思いました。どれも一回学習しているのに、作者の生涯なども含めたまた作品を読むと全く捉え方が違い、全く別の作品を読んでいるようでした。「文学と言語」を通して自分自身の考え方や捉え方が変わりました。これからもいろいろな作品を読んでいきたいと思いました。

・ 「文学と言語」の授業で学んだことは、小学生から高校生までの国語の時間とは違い「文学を読む」という行為は、文の表面だけでなく、より深く掘り下げていき、文章を作った作者の心情、その時代の背景、作者の経歴について学ぶことができることを知った。

・ 文学を読むことは作者と共に想像の世界を楽しむことが基本であると思った。作品の題名、構成などを考え、予想し、表現を読み取ることができるよう、情景描写や言葉遣い、比喻表現、独自の言葉を読み取ることで理解できるようになる。作品だけでなく作者の時代背景や取り巻く環境や触れ合った自然を調べることで、作者や作品を深く理解できることを、これまでの授業で学びこれから読む時はいろいろなことを感じるようになりたい。

・ 文学を読む上でのコツを教わった。(1)題名から内容を予想する(2)文章構成の理解(3)情景描写、言葉遣い、比喻などの表現(4)時代背景の理解(5)作者を取り巻く環境、地域性の理解(6)人生観、自然観、考え方の理解である。「文学と言語」の授業は楽しかった。

・ これまで「文学と言語」の学習をしてきて、何より物語の面白さに気付かされました。作者が用いている効果的な表現に気を付けて読み、登場人物の関係や情景描写をとらえる力が以前よりも格段に身に付いたと思います。ただ作品を読むのではなくて作家そのものや、作家が生きた時代といった背景について知ることがとても大切だと分かりました。文学には正解がなく、一人一人考え方や受け止め方が違うから作品を自分のペースでゆっくり、じっくり味わいながら読むことができるので楽しいし、時には過去にタイムスリップして、自分が実際には体験できないことを間接的に楽しめる魅力だってある。これからもっと多くの文学と関わり、文学で旅をしていきたいです。

・ 今までの授業の中でたくさんさんの作品を振り返ってきた。「ごんぎつね」もそうだが、金子みすゞや宮沢賢治など授業を一度過去に受けていたのに忘れていたことが多かった。教師を目指す身として覚えておくべき内容でもあり、自分自身が子どもたちに授業していく立場へとなっていく。この授業で学んだことは必ず今後また出合う内容でもあり必要になってくる。先生の語り方や問いかけ方は授業へと引き付けられるものであったため、そのやり方を真似しつつ今後生かしていきたいと思う。

・ 私が(文学と言語)を選択したのは、読書が好きだったことはもちろんですが、将来の自分の児童にも文学の面白さを伝えられるように学んでおきたいと考えたからです。一回目の授業では、私が思う文学を読むことの意義についてしっかりと意見を持つことができ、自分のこれからの学びの軸についての確認ができました。二回目の授業では、文学・語感について学び定義を知ることができました。三回目からの授業では、金子みすゞさん、宮沢賢治さんや、新美南吉さんなど有名な作者さんの生涯と内容に関して学んで、普段から自然や身の回りの人たちに興味・関心をもつことが大切であることや、作品を読む際に

はただ読むだけでなくその時代の背景や著者の家庭環境などを知ることが大切であることを学びました。また、作家以外としての活動を行っている方々がいたことも初めて知ったので、作品内容にその件に関連することなどを見つけれられるのもとても楽しい学習でした。文学を読む＝作者とともに想像の世界を楽しむという考え方は、私が教師になった時も忘れず大切にしたいなあと思いました。スイミーの英語版の学習をしたのも一番印象に残っています。翻訳前の作品を読んで自分なりに日本語に訳してみるのも、また変わって素敵な学習だということを学びました。

・授業で一番印象に残っていることは、文学を楽しむという話です。難しいところや、分からないところはそのままでもいい、分からないところが分かったということ自体が学びであるという先生の話がとても印象に残っています。子どもに授業をするとき、答えを教えるのではなく、以上のような点に注目しやすいうように支援し、ポイントを示してあげることで子どもの理解を深めることができるようになりたいと思いました。

・文学を楽しむ＝作者と共に想像の世界を楽しむ。と、先生がおっしゃっていたのを聞いて、これまでは、授業＝学ばなければ”いけない”という感じ方でしたが、これからは楽しみながら意欲的に学びたいと思いました。

・生き方の知恵や私たちにとって大事なことを、すべきことを多く教えてくれる。自分自身受け身になるのではなく、アンテナを張り積極的に文学に触れていきたい。

6. 授業の評価と考察

学生による授業評価（記述）と数的評価は、次のようであった。（110名中82名、75.5%が回答）

・わかりやすい授業でした。対面講義で学びたかったです。
・オンラインでの授業だったが、先生の熱心さが伝わってきた。
・文学への興味が深まった。私はあまり国語が得意ではなかったが、解説が分かりやすくとても勉強になった。また、毎回提出した課題に丁寧に返信をしてくださったのでやる気にも繋がった。
・大切なことなどを板書でまとめてあり、わかりやすかった。
・資料と経験などの話でとても楽しく受けやすい授業だった。
・教科だけの知識ではなく、実生活に生かせるような知識が身につく、とてもためになりました。
・いろいろな作品に触れることができよかったです。
・質問等にも丁寧に答えていただき、課題提出がとても楽しみでした。いい授業を受けることができたと感じています。
・授業の速さもちょうどよくてわかりやすかった。
・文学は、大変堅苦しく、分かりづらいと思っていましたが、文学の楽しさを先生の体験からも教えていただくことができ、わかりやすく大変楽しく学ばせていただけました。今後もいろいろな文学を学びたいと思いました。
・ZOOMを使った授業で、先生がホワイトボードに文字を書いた時、文字が見えづらかった時がありました。（原文のまま記した）

【質問6】 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。（3.38）

【質問7】 教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。（3.57）

【質問8】 授業は興味・関心が持てる工夫がされていきましたか。（3.61）

【質問9】 授業は分かりやすくする工夫がされてい

ましたか。（3.61）

【質問10】 視聴覚機器や板書の使い方は適切でしたか。（3.57）

【質問11】 教科書・配布資料等は役に立ちましたか。（3.62）

【質問12】 声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。（3.63）

【質問13】 授業の進む速さは適切でしたか。（3.61）

【質問14】 学生の質問等に誠実に対応しましたか。（3.68）

【質問15】 公平に学生に対応しましたか。（3.73）

【質問16】 教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。（3.74）

【質問17】 教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。（3.77）

【質問18】 この授業を総合評価してください。（3.62）

前頁の学生評価結果から、授業者として以下の授業評価を行い、考察を加えた。

1) 全ての質問で学科平均を上回り、【質問6】【質問7】【質問10】を除き、3.61以上であった。

授業に当たって、学生の意欲を基盤に据えた授業づくりのため、【質問7】【質問8】に関係する「導入の工夫」、【質問11】に関係する「資料の工夫・選択」、そして【質問8】【質問9】【質問10】に関わりのある「指導方法の工夫」に力を入れてきたことが高い評価につながったのではないかと考える。

2) 【質問15】【質問16】【質問17】は、何れも3.7を超える高い評価であった。私自身、意識して取り組んだという思いはあまりないが、学生から褒められている結果となって、嬉しい限りである。

3) 数的評価（数値）の根拠を裏付けるのが自由記述であると考え。これからも学生の思いや願いを真摯に受け止めながら、「分かる」授業、「学びの楽しさ」を感得する授業づくりに努めていきたい。

4) 課題もある。【質問6】と【質問7】は、3.6を下回っている。今後、「シラバス（授業計画）」と「到達目標（学習のめあて）」のさらなる検討が必要である。学生がより学習の見通しや具体的なイメージをもてるようなものに改訂していきたいと考える。この二つは、学習の方向付けを担うものであり、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現に向けた授業づくりに

において重要な意義と役割をもっているからである。

7. まとめ（成果と課題）

コロナ禍が収まらない現実の中、遠隔授業の取り組みが始まった。と言うよりも、せざるを得なくなった。急激な変化に対応すべく、これまでの知識や経験では対応できない時がやって来たという不安や恐れを感じながら毎日が過ぎていった。

そうした折、FD研修会の発表の依頼があった。アナログ人間である私がなぜ発表なのか。また悩み始めた。しかし、時間が経つにつれて、考えが変わってきた。今だからこそ、整理せねばならないと思った。これまでの経験や実践を生かして、改めて授業と向かい合うことにした。

それは、遠隔授業や対面授業とか、型や方法というよりも、授業とは何か、学ぶとは何かといった本質に立ち返り、学生に、楽しく、学びの深い授業づくりを提供しようというねらいであった。

ところで、本稿で紹介した実践は拙いものであったが、授業をすることがこんなにも楽しいのかと、改めて実感することができた。以下、本実践を通した成果と課題を述べる。

(1) 成果

1) 学び（授業）の本質は変わらない。

①授業の中で、学生一人一人が自分の学びや課題及び、互いの学びや課題を共有するとともに、それらを認め合うこと。②自分の課題の解決に向けて学びを深めるために、互いに高め合う活動や学びを大切にしていくこと。③自分の学びを具体的かつ客観的に振り返ることで、自分の伸びを実感できるようにすること。以上の三点を大切にすることができた。

2) 学び手の反応をテキストにして、授業を深める。

104頁と106頁で述べたように、「教科書をテキストとして」読むのではなく、教科書を読んだ「学び手の反応をテキストとして」読むことである。

3) 遠隔授業の充実の鍵は、どれだけ「対面」を意識しているかにかかっている。遠隔授業であろうが対面授業であろうが、大切なことは、学び手一人一人が互いに伝え合い、関わり合うことの意義を実感できる授業の創造である。そのために、学びを整理し定着させたり、思考の跡を可視化したりするための「板書（チョークを使うだけではない）」の意義が重要になってくる。

4) 遠隔授業だからこそ、個別指導の重要性が増し

てきた。「授業のまとめ（共通指導）」と「一人一人の見取り（個別指導）」の相乗効果が期待できる。

(2) 課題

1) 遠隔授業におけるリアルタイムでの学習者間の交流をどうするか。これは、教師のメディアリテラシーの向上と関係が深い。ITCの技能をいかに高めていくか。私自身の課題である。

2) 評価の工夫が必要である。今回は、「学修ポートフォリオ」を礎にした授業実践を行った。紙媒体での評価は時間を要する。1) と関係するが、リアルタイムでの評価をどうするか。今後の課題である。

引用文献・参考文献

- 1) 岩根浩「国語科学習過程の研究（1）」（西九州大学子ども学部紀要第9号，2017，126頁）
- 2) 峠兵太「じんちょうげの花」（小学校教科書『国語5年上』昭和52年度版，光村図書）
- 3) 矢崎節夫『金子みすゞの110年』（2013，JULA出版局，7頁）